

白血病 低線量でもリスク増

国際がん研 作業員30万人調査

【ワシントン共同】

低線量の放射線を長期にわたって浴びるこ

調査妥当か検証を

放射線医学総合研究

所の明石真言理事の話

今回の調査結果は母

集団が30万人以上とい

う点で低線量被ばくの

疫学調査としては最大

規模であり、注目すべ

とで、白血病のリスクがごくわずかだが上昇するとの疫学調査結果

き貴重なデータといえる。しかし調査手法の妥当性について検証する必要がある。妥当と判断されれば、日本の原発作業員について被ばく限度の引き下げを検討する必要がある。出てくるかもしれない。

を、国際がん研究機関（本部フランス）などのチームが英医学誌ラ・ンセット・ヘマトロジーに発表した。欧米の原子力施設で働く30万人以上の被ばく線量と健康状態のデータを分析。低線量被ばくの健康影響を統計的に示した研究は少なく、東京電力福島第1原発など

2015-7-2 毎日

で働く作業員や、放射線機器を扱う医療従事者の健康管理に役立つ可能性がある。

リスク上昇が非常に小さいため、国際放射線防護委員会（ICRP）の勧告に基づいて政府などが定める被ばく線量限度の再検討は必要なさそう。ただ一定の線量を超えないと健康影響は出ないとする考え方は見直しを迫られそうだ。

チームは過去約60年間、フランスと英国、

米国の原発や核燃料施設などで1年以上働いた約30万8300人の健康状態と被ばく線量の関係を統計的に分析した。結果は、被ばくがなくても白血病を発

症する可能性を1とすれば「相対リスク」を考えた場合、1ミリの被ばくごとに相対リスクが1000分の3程度上昇するという内容。100ミリ以下の低線

量でもリスクはなくならないとした。作業員の年間被ばく線量は平均1・1ミリシーベルト、積算線量は平均15・9ミリシーベルトで、531人が白血病で死亡。リン

パ腫なども調べたが、明確なリスク上昇は確認できなかった。今回の研究費は、米エネルギー省や日本の厚生労働省などが拠出した。